

インドネシアの泥炭地の現状と回復への取組み [Wetlands International Indonesia(WIIP) ヨヨ氏]

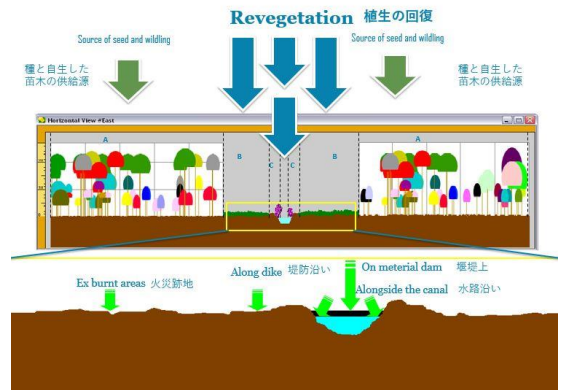
2月4日、大阪のワンワールドフェスティバルで、テレビ関西の1階ホールのオープンスペースで泥炭湿地の保全を訴えるヨヨさんの講演会を行いました。大変わかりやすい講演でしたので、その記録を以下に掲載します。できるだけヨヨさんのお話をそのまま掲載しようと考えましたが、スペースの都合で一部まとめたり、削除したりしています。

熱帯泥炭地と森林破壊、劣化について

泥炭地とは、他の土壌と違って強酸性で、多くの有機物を含んでいる為、水はコーヒーのような黒色をしています。泥炭地分布は約2100万ha(2003年WIIP調査)から1490万ha(2013年インドネシア農業省調査)に減少しています。何故泥炭地が重要かと言うと4つの大きな役割と機能があります。生物多様性では、オランウータン等の棲みかとなり、気候変動については、炭素の貯蔵庫と呼ばれるほど炭素を含んでいます。水環境の調整では、泥炭地は大きなスポンジのようなもので、雨季には多くの水を取り込み、乾季にはゆっくり排出し、洪水と干ばつを防ぎます。そこに棲む地域住民にとって、森はいろいろな生計手段を提供してくれます。

残念なことに泥炭湿地林破壊の原因は、1.木材の伐採 2.森林火災 3.泥炭地の排水。泥炭地に水路をつくり水を流し出し、森を乾燥させます(火災にも繋がります)。4.農園への転換です。2016年の時点で170万haの泥炭地がアプラヤシ農園に、200万haが製紙業の原料になるアカシアの植林地へ転換されています。

このような要因から破壊されている泥炭地を回復する為に、私達WIIPも様々な取り組みをしています。ここで回復というのは泥炭地の排水を防ぐ再湿潤化を指しています。2002~2007年に、CCFPI、CKPPのプロジェクトで何百もの堰堤をつくりブランゲラン等拘りの在来種12種を植樹しました。活動は排水路沿いに行い、水路から少し離れた両側に残っている森から在来種の種や苗木を取って、苗床で育てて植樹する方法を取っています。スマトラ島の泥炭地復旧では地域のコミュニティと近くの伐採会社、国立公園等のステークホルダーを巻き込み20haを回復しました。特徴的なのはこのエリアが頻りに洪水に会う為、盛り土をしていることです。このときの辛い経験は植樹して最初の1カ月は苗木の生存率が80%以上でしたが、50年に一度の大洪水の為、たった4.9%になってしまったことです。この辛い経験を元に、植林の樹種を最も成長が早く浸水への適応が高い在来種に絞ったところ、苗木の生存率を40%~83%にすることができました。



生命の権利(バイオリイツ)

ポイントは、プロジェクトと共に活動が終るのではなく、条件付きのマイクロクレジットとコミュニティ・エンパワーメントを通しての環境修復/保全を結びつけました。地元住民の貧困が大きな問題ですので、生計手段を確保しながら生計手段が環境を壊さないように、私達の目的と合うこと(つまり植樹)の条件付きでローンを出し出す仕組みにしました。例えば、養鶏する際にも植樹を条件にします。但し植樹の生存率が高かった場合にはローンの返済はなしとしました。こうすることで彼らの生活と活動が関連していると感じてもらおうことを目指しました。

インドネシア政府の取り組みとして、2009年に掲げた排出削減公約は2020年までに従来比26%減、国際的な支援があれば41%減でしたが、2016年の改定目標では2030年までに29%減、国際支援下で41%減とされた。二酸化炭素排出削減公約と泥炭地回復とは強く結びついておりOneMap政策やモラトリアム政策（泥炭地開発凍結）を実施しています。政府は泥炭地保護に関する規制を発し活動を加速させるためにBRG(泥炭地回復庁)を立ち上げ、5年間で200万haの泥炭地回復を目標に掲げています。BRGの活動の3つの柱が、再湿潤化、植生回復、コミュニティの再活性化です。

WIIPが、最近立ち上げたインドネシア泥炭地パートナーシップ基金は地域に根差した、泥炭地保全、回復、持続的開発を支援する少額贈与プログラムです。去年の募集は123件の申請があり、厳正な審査の元地域に根差した10団体に1団体毎240万円の資金を提供しました。これは上手く進んでおり来年への資金提供先も只今募集しています。

また、WIIPはBRGと共に年間回復計画の支援をしており、WRI、ICRAFと南スマトラで泥炭地回復計画を提供し、BRGの青写真に取り入れる検討をしています。また、地元の植生を活用することで土地を乾燥させずに行う植樹あるいは農業の方法として「パルディカルチャー」があり、持続可能な泥炭地管理の代替法と考えています。

泥炭地回復デザインにパルディカルチャーを含めるよう提言し、訓練提供、コミュニティ支援と促進を行っています。様々な地域で伝統的な例として、スマトラ島リアウ州スンガイ・トホール村では伝統的にサゴヤシを生産し澱粉にし国内販売だけでなく輸出までしています。

泥炭地にとって火災が一番怖いものですので消火用に深井戸を掘削しています。

2016年～17年には大学と50本の井戸を建設し、コミュニティや行政府の手で稼働されています。

最後に泥炭地回復への課題をご紹介します。

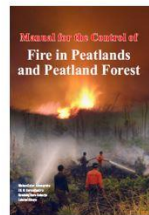
1. 泥炭地回復を地域の計画や政策に統合すること
2. 技術的能力
3. 関係するステークホルダー全てをどのように巻き込むか
4. 産業と泥炭地での持続可能性の為に排水に基づく産業を段階的に廃止すること
5. 今迄の湿地を排水し乾燥を必要とする産業からパルディカルチャーに変換すること
6. 回復の成功水準。何本木を植えたかではなく何本生き残ったかで測る。これは簡単なことではありません。
7. 資金調達。ご紹介した取り組みは大きなコストが掛かりますのでWIIでは常に資金提供先を探しています。
8. 地域住民、コミュニティを回復させる
9. 回復に対する取り組みが持続可能であること
10. 一番難しく一番重要なのは火災ゼロということ どんなに立派なプロジェクトをしても、火災で全てなくなってしまいます。

ご清聴ありがとうございました。

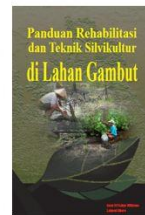
(※泥炭地管理資料に関してはWEBサイトをご覧ください。)(記録 Gyro 加納)

Best Management Practices

泥炭地管理の推奨方法



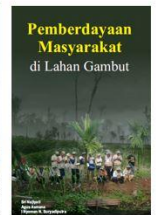
泥炭地火災消火マニュアル



泥炭地の復旧と植林技術ガイドブック



泥炭地での住民と協働した復旧のガイドブック



泥炭地での住民エンパワーメント